



TITLE:

瀬戸臨海実験所五十年史 1922～1972

AUTHOR(S):

京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所創立五十周年
記念事業実行委員会

CITATION:

京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所創立五十周年記念事業実行委員会.
瀬戸臨海実験所五十年史 1922～1972. 1972

ISSUE DATE:

1972-09-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198783>

RIGHT:



瀬戸臨海実験所五十年史

1922～1972

京都大学理学部附属

瀬戸臨海実験所

昭和47年9月

表紙は石珊瑚ハイミドリイシ *Acropora surculosa* (Dana)
の骨格標本写真



瀬戸臨海実験所の位置する瀬戸半島番所崎の眺望

ま え が き

京都大学理学部付属瀬戸臨海実験所は、昭和47年（1972）7月28日をもって創立50周年を迎えた。われわれはその記念のためにいくつかの行事を計画したが、この五十年史の出版もそのひとつである。

わが国の臨海実験所の沿革をひもとくと、当実験所が京都大学に設置され、活動を開始したのは大正11年（1922）の夏のさなかであるから、東京大学の三崎臨海実験所および北海道大学のおしよろ忍路臨海実験所に次いで古い。実験所の現在の位置は、創始者京都大学教授池田岩治が選定したものであって、今日の発展の礎をつくったのはじつに彼の先見の明によるものであると言わねばならない。しかしながら、先達の歩んできた道が決して平坦なものではなく、苦難の連続であったことは、この小冊子を読んでいただければ納得できるにちがいない。

創設当初から実験所日誌に書きのこされた過去の記録は、筆録者の不在のこともあって、完全なものではない。幾人かの方にご支援を願って、できる限り不備を補ったつもりであるが、なお遺漏あるいは誤記の多いことをおそれる。いずれにせよ、本小冊子が当実験所50年の歴史を要約した回顧録に止まらず、反省の資料ともなり、実験所の将来の発展への一礎石ともなれば幸いである。

本小冊子作成にあたっては、理学部事務室および実験所の各位から種々協力を受けた。また、出版費については京都大学当局から多大の配慮をいただいた。ここに記して感謝の意を表するしだいである。

ただわれわれが遺憾なのは、実験所創設者であった池田岩治教授の急逝によって、実質的に実験所の創設に尽され、その後多年にわたって幹事や所長を歴任された日本学士院会員京都大学名誉教授駒井卓先生が、五十周年の記念式典を待たずして、本年7月9日午後11時、敗血症のため86歳の高齢をもって長逝されたことである。この五十年史も、もし先生の御校閲を得ることができたなら、さらに完全なものになったであろうことが惜しまれてならない。ここに、謹んで先生の御遺業を偲ぶとともに、先生の御冥福を祈るしだいである。

昭和47年8月

瀬戸臨海実験所長
五十周年記念事業実行委員会代表

内海 富士夫

目 次

ま え が き	i
1. 創 設 の 由 来	1
a) 所在地と環境	1
b) 現在地に定められるまでの経緯	1
2. 創設以後の略史	3
a) 第一期（大正11年～昭和10年，1922～1935）	3
b) 第二期（昭和11年～昭和20年，1936～1945）	5
c) 第三期（昭和21年～昭和30年，1946～1955）	7
d) 第四期（昭和31年～昭和39年，1956～1964）	9
e) 第五期（昭和40年～昭和46年，1965～1971）	10
3. 現 状	15
a) 施設のあらまし	15
b) 研 究 活 動	17
c) 業 績 の 発 表	17
d) 教 育 活 動	18
e) 付 属 水 族 館	19
f) 職 員	19
g) 併任教官および実験所運営委員協議会学外委員	20
旧研究職員名簿	21
あ と が き	23
瀬戸臨海実験所建物配置図	裏表紙内側

1. 創 設 の 由 来

a) 所在地と環境

瀬戸臨海実験所は、和歌山県西牟婁郡白浜町の西北端に田辺湾を扼して突出する瀬戸半島の先端、もと紀伊藩主徳川頼宣の別荘の跡と称する番所崎の頸部約 40,627 m² の砂洲を占め、松林の間にハマユウやスイセン等が多く自生し、もとは桔梗が多かったので桔梗平と呼ばれたこともある風光明媚な地域に位置する。南北は海に面し、付近の気候は四時温暖、冬期も気温 7°C 前後で雪は稀、夏期は 27°C 内外で風があって凌ぎよい。

付近の海には黒潮の分流が入りこみ、生物相は熱帯色にあふれ、種類が豊富である。田辺湾は肢湾に富み、海岸線には地質学的に珍重すべき標式的地形が多く存在し、いずれも天然記念物として保護されている。湾内の島々、とくに湾奥の島は、世界にも稀にみる豊富な生物相の集約された場所であるので、昭和43年12月実験所はこの島を実験地として国費購入、同46年研究分室を設置した。

b) 現在地に定められるまでの経緯

紀州（和歌山県）に、古くは幕末の本草学者で「水族志」（1884）等の良書を著わした¹⁾ 翠山^{さいさん}畔田十兵衛翁、紀伊沿海の魚族を調査して「紀州魚譜」（1929）等を著わした²⁾ 篤学者^{あつがくしや} 宇井縫藏翁（1878-1946）、あるいは古今に比べるもののない碩学と称せられる南方熊楠翁^{みなみかたけふみ}（1867-1941）の如きすぐれた学者が輩出した所以もさきにもべたような天与のめぐまれた自然環境がもたらしたものといえるかもしれない。

大正8年（1917）7月、広島高等師範学校から京都帝国大学理学部教授として招かれ、生物学科の開設に尽した池田岩治（1872-1922）は、東京帝国大学動物学科に在学中よりユムシ・ホシムシ類の研究で広く知られており、臨海実験所設置の必要性もつとに痛感していたので、動物学教室の整備が一段落を告げる頃からその努力は主として臨海実験所の設置に向って集中された。予算の如きも大正9年度の分より要求せられたのであったが、翌大正10年度になってようやく実現の見通しがついたのである。その年のはじめ、池田教授は自ら和歌山県・三重県の海岸を巡り、諸所の候補地を検分の末、種々の点よりみて、現在地が最も適当と考えた。そして、いよいよ予算確定の後、大学側と県・郡・村²⁾の当局者等と折衝の上、はじめ割り当てられていた15万円余りの国費のうちの一部は別府の地球物理学研究施設の開設に割かれたので、残額11万円余りが実際に臨海実験所の新設に用いられることになった。いっぽう、和歌山県より5万円相当の建物の一部・図書および顕微鏡類など、瀬戸鉛山村よりは敷地 3.227 坪余りが無償提供された。池田教授はその位置の選定、地元との交渉、建物および内部設備の設計、図書



創設者 池田岩治教授

1) いま、隣接の番所山公園の山上に、その功績をたたえるために建設された「南方記念館」がある。

2) 当時、白浜町は瀬戸鉛山村と称されていた。

および機器類の購入等、ほとんど自ら手をくだして尽力されたのであったが、不幸にしてその竣工をみるにいたらず、ひと月前の大正11年6月、不治の難病のため逝去した。享年51歳。

実験所敷地の整地と建築は大正10年夏に始められ、翌11年（1922）春、建物が竣工し、これに併行して、採集実習船「入神丸」（19 ton, 48 feet, 25 H.P. セミディーゼル機関付）もできあがり、荒木寅三郎総長命名の船名をつけて、現地に回航された。同年7月16—27日、京都大学第1回の動・植物学科学学生の臨海実習をおこなうことができた。その時の教官および学生の氏名は次のとおりであった。

教官——駒井卓助教授、東光治講師、赤塚孝三講師、山本宣治医学部講師（大津、臨湖実験所勤務）、井狩二郎助手、土田清忠嘱託（京都）

学生——鈴木栄二、晴山省吾、山田種三郎、山内年彦、三木茂、清水節、杉本唯三、前田威成、増井公木、土屋格

第1回の臨海実習の終了した翌7月28日、地方および地元の人びとを招き、京都から総長荒木寅三郎以下数名出張して、11時より開所式をおこなった。

この実験所の開設には多数の人びとの力があずかったことはいうまでもないが、とくに地元の人びとの好意と尽力には感謝しなければならない。その多くは今では故人であるが、和歌山県知事 小原新三、西牟婁郡書記 桑原豊蔵、瀬戸鉛山村村長 浦漣、貴族院議員 徳川頼倫、紀南真珠養殖場主 芝田与七等の諸氏である。

開設の当初、実験所は「瀬戸臨海研究所」と呼ばれ、正門を東に、番所山麓を西とする疎林を交えた荒地に主な建物が6棟雁木状にたちならんでいた。すなわち、東より西に順次算えて、管理人宿舎（70 m²）、寄宿舍（403 m²）、特別研究室（132 m²）、実習室（224 m²）、研究室（303 m²）および水槽室（188 m²）で、ほかに物置等を合せて総建坪 1,223.5 m² であった。すべて木造平屋建で、水槽室には半地下式に4個の観覧用水槽と取水用ポンプを入れる地下室が設けられていた。

その後の相次ぐ災害と2度に及ぶ大改築によって、現在は当時の面影は失われているが、南北の海岸沿いに残されている防潮防風に役立ったクロマツ林が千古の緑をたたえ、往時を偲ぶよすがともなっている。



創設当時の実験所（東側山上より遠望）

2. 創設以後の略史

a) 第一期（大正11年～昭和10年，1922～1935）

大正11年（1922）7月28日，瀬戸臨海研究所が京都帝国大学理学部の付属研究施設として発足した。

発足当時の在任職員としては，前年（1921）10月31日発令され，大正11年（1922）2月22日赴任した北海道帝国大学付属水産専門部出身の藻類専門家井符二郎助手，“海の生字引”と称された採集船入神丸の船長雑賀弥之助（1888-1957），および寄宿舎小使として新しくやとい入れた正木常蔵の3名にすぎなかった。当時はむろん紀勢本線はまだ開通しておらず，交通きわめて不便であったために，京阪地方からさえ僻遠の地と考えられていた。実験所から近くの瀬戸部落に行くにも，雑草の生い茂った峠を越えねばならなかったばかりか，構内には雉の子や野兎などもすんでいて，昔ながらの自然がまだ多く汚されることなく残っていた。

大正11年（1922）3月23日，京都帝国大学医科大学講師として草創期の大津臨湖実験所（当時は医科大学に付属）にあった藻類学者赤塚孝三が新しく研究所主任として迎えられた。同年6月不測の病に倒れた創設者池田岩治教授に代って，京都帝国大学理学部動物学科第二講座担任の川村多実二教授（大津臨湖実験所幹事）が臨時所長代理として7月28日の研究所開所式を主宰した。



初代幹事（代行） 川村多実二教授



第二代幹事および初代所長 駒井 卓教授

大正12年（1923）4月14日，東京帝国大学動物学科出身の宮下義信が助手に任命され着任したが，翌13年3月職を免ぜられた。大正12年（1923）5月14日，赤塚孝三講師は助教授に昇進，翌13年5月，京都の動物学教室に転じた。同年6月，管原照清が雇員として着任した。

大正14年（1925），満2年間の欧米留学を終えて帰学した駒井卓助教授は京都帝国大学教授に任ぜられ，動物学科第一講座担任のまま，実験所幹事（当時は所長制はなく，幹事の名称がもちいられた）を兼ねることとなった。同年3月25日より4月6日まで，調査船入神丸は赤塚助教授以下17名を乗せて長途瀬戸内海へ採集航海を決行した。

大正年間には臨海実験所の草創期であったが、創設者池田教授の意図を受け継いで、貧弱な設備と陣容にもかかわらず、所員による海産動植物の研究と併行して、開設以来毎年春・夏の2期京都大学動物・植物学科学学生の臨海実習を続けるほか、隔年に全国の中等学校の博物科受持教員のため夏期臨海講習会を開催し、行幸の前年までに合計5回におよんだ。

昭和4年(1929)6月1日、天皇陛下は御召艦長門に乗御され田辺湾に入られた後、実験所に御成り、10時より駒井卓教授、小松茂教授(理学部化学科、生物化学)、赤塚孝三助教授、石川成章講師(理学部地質学科、地質学)、黒田徳米助手(理学部地質学科、貝類学)、井狩二郎助手の進講をきかせられた。午後、駒井教授以下奉陪して、陛下は小舟で四双島・塔島・神島・島島を巡られ、生物採集に興ぜられた。この行幸は実験所の歴史に一転機をもたらし、4年後には国鉄紀勢西線の南下によって白浜駅(当時は白浜口駅)が町の近くに設けられる等、白浜および実験所を今日の発展に導いた基であることは否めない。しかし、いっぽう、これより第二次世界大戦が終るまで実験所の歴史は苦難の道を進むことになる。

昭和5年(1930)6月1日、行幸1周年を記念して、構内に時の総長新城新蔵の撰になる碑文を刻した臨幸記念碑が建てられ、同時に実験所の水槽室に多少の修築を施して一般に公開することとなった。翌年3月31日には水族館観覧規程が制定された。

その前年まで実験所幹事は駒井卓教授が動物学科第一講座担任のまま兼ねていたが、昭和4年(1929)4月13日より昭和12年(1937)3月24日までの間、新設の第三講座担任を命ぜられた岡田要教授に引き継がれた。

昭和4年(1929)4月30日、動物学科をその前年卒業した滝巖が助手として採用された。京都大学出身者で実験所所員になったのは彼が最初である。

昭和6年(1931)1月16日、実験所開設以来創設に尽した井狩二郎助手は病を得て職を辞し、郷里滋賀県近江八幡に退いた。昭和12年7月19日没後、彼が生前集めた藻類学を主体とした大きな蔵書は遺族の手によって実験所に寄贈され、「井狩文庫」として図書資料保管庫の書架を飾り、現在にいたるまでひろく研究者に活用されている。

昭和6年には、このほか、次のような人事の異動をみた。すなわち、1月31日には動物学科昭和5年卒の椎野季雄が助手に任ぜられ、同じく3月31日には椎野と同級の杉野久雄が副手に採用されて、それぞれ着任した。

昭和8年(1933)7月10日、滝巖助手が広島文理科大学助教授として同大学向島臨海実験所に転出した。また、同年9月30日には、実験所開設以来在任主任として創設に尽した赤塚孝三助教授が在勤11年で退官し、郷里津市に去った。

昭和9年(1934)動物学科昭和7年卒の内海富士夫(当時、弘姓)が1月31日研究嘱託、3月31日講師、動物学科9年卒の平林清が副手、大阪の商業学校出身の徳岡泰広が雇員をそれぞれ嘱託せられ、海軍より委託された船底汚損生物の防汚を目的とする基礎的研究を岡田教授(幹事)の指導の下に開始した。その成果は昭和14年と16年の2回にわたって海軍技術研究所の報告に発表されたのみで、一般には公表されなかったけれども、その後大々的に行なわれた戦時研究の先鞭をなすものであって、平林清はその経験を生かして後に京都大学化学研究所に繊維化学専攻の講師(のち助教授)と



第三代幹事 岡田 要教授

して転じ（昭和13年5月）、また徳岡泰広は日本油脂会社ペイント研究部に転じた（昭和15年11月）。内海富士夫は在職のまま委任統治領ミクロネシアのコロール島に日本学術振興会によって設立されたパオ熱帯生物研究所（所長 故畑井新喜司博士）に最初の研究員として参画し、昭和9年6月、畑井所長、阿部襄研究員（東北帝国大学）と共にコロール島に渡島、新設する研究所の位置選定、設備品の調達、岩山湾の地図作成、同湾周辺の珊瑚礁の予備調査、石サンゴ類の共生動物の研究等に従事し、8ヵ月後の翌10年2月帰所した。

昭和9年9月22日、近畿地方に未曾有の大被害を与えた室戸台風が来襲し、実験所水槽室と寄宿舎に床下まで浸水という災害をもたらした。

翌10年（1935）3月、復旧工事により、旧寄宿舎は学生寄宿舎と官舎に分割され、旧位置よりも北海岸寄りに移築された。その結果空地となった寄宿舎跡は、6月になって、小松やイトラン等を路側に植栽し庭園に模様替えされ、風致は一新した。7月には、採集船‘Pelagia’（32 feet, 22.5 H.P.）、和船‘Janthina’（24 feet, 5 H.P.）と手漕ぎボート3隻（‘Ephyra’、‘Veliger’、‘Zoea’）が新造された。なお、創設当初からの調査船‘入神丸’は台風時期保管困難のため離籍し、払い下げられた。また、構内西北隅に京都大学運動部の管理する厚生施設“海の家”（当時の名称はサマー・ハウス）が新設された。

昭和10年（1935）1月31日、宮下義信が嘱託としてふたたび所員に加わった。彼は本来原虫類専攻の研究者であったが、海産無脊椎動物についても造詣が深く、白浜では病氣療養を兼ねての研究生生活に終始したが、まもなく辞して帰郷した（昭和17年7月17日死去）。

上記草創期にも実験所を訪れる研究者は多く、植物学者としては、小泉源一（大正11年8月、神島植物相調査）、岡村金太郎（大正12年7月、海藻採集）、牧野富太郎（大正13年9月、島島植物採集）、動物学者としては、森田淳一（大正11年7月、動物実験）、黒岩恒（大正11年7-8月、淡水魚調査）、妹尾秀実・雨宮育作（大正12年8月、水産講習会講師）、横屋猷（大正14年7月、カニ類調査）、湯浅八郎・林泉・徳永雅明（昭和2年7月、海浜昆虫調査）、大島広（昭和2年8月、海グモ類採集）、森島以（昭和3年4月、橈脚類採集）等がおもな人びとであった。

昭和10年12月現在の所員は次のようであった（雇傭人は省略）。

教授 岡田 要（幹事）
講師 内海富士夫
助手 椎野 季雄
副手 平林 清
嘱託 徳岡 泰広、雑賀弥之助（船長）

b) 第二期（昭和11年～昭和20年、1936～1945）

昭和11年（1936）1月、記録的な酷寒が来襲し、水温は連日 12°C 以下となり、水族館に飼育中の魚はほとんど凍死した記録が残されている。4月1日、職員の大異動がおこなわれ、東京帝国大学動物学科出身で天津臨海実験所講師として11年間在勤の宮地伝三郎が助教授に昇進し、実験所主任として着任、椎野季雄助手は動物学教室第一講座の助手として転じた。

昭和12年（1937）11月10日、岡田要教授が東京帝国大学へ転出したので、駒井卓教授がふたたび実験所幹事に補せられた。

同年12月24日、勅令第732号をもって京都帝国大学官制の一部が改正され、ここにはじめて実験所に官制がしかれることとなり、名称も臨海研究所に代って、以後臨海実験所と呼ばれるようになった。同時に幹事制は廃止されて、所長が置かれ、駒井教授が初代の所長に任ぜられた。

実験所は開設以来長らく交通不便をかこっていたが、大正10年和歌山から着工して13カ年を経てようやく白浜へ鉄道が通じたのである。白浜駅（当時は白浜口駅と称した）より白浜へいたる県道は昭和10年頃から部分的に舗装され、また、白浜より実験所正門までの海岸沿いの道路は昭和4年の天皇行幸の際にきまり、ほどなくバスも通じるようになったので、往時とくらべるとすこぶる便利になった。行幸十周年を迎える頃から水族館を訪れる観光客も年々ふえてきたので、昭和10年6月、北側に標本陳列室を、また、昭和13年10月には南側にウミガメを放飼する屋外プールを増設した。同年2月27日より水族館の経営は白浜土地会社に委託されることになり、7月30日水族館観覧券払下規程が制定された。

昭和13年（1938）6月30日、京都帝国大学動物学科昭和11年卒の時岡隆が、三井海洋生物学研究所より助手として着任した。

昭和14年（1939）4月、内海富士夫講師は応召し、北支・南支・仏印・中支に転戦、代って、4月30日、動物学科昭和13年卒の野沢兼文が助手として発令された。

昭和15年（1940）4月7日、時岡隆助手は日本学術振興会よりパラオ熱帯生物研究所に派遣され、主としてプランクトン調査とホヤ類の採集に従事し、8カ月滞在して、翌16年1月30日帰任した。15年6月30日、北海道帝国大学付属水産専門部出身の増井哲夫が新たに研究を嘱託せられ、宮地助教授のベントス調査をたずけることになったが、17年7月15日辞職帰郷、10月30日病没した。

昭和16年（1941）8月11日、野沢助手は動物学科第一講座の助手として配置換えとなり、在職1年8カ月で京都に転じた。同年11月4日、征旅3カ年に及ぶ内海講師が帰任した。また、同年12月30日には動物学科昭和16年卒の波部忠重が嘱託として着任した。

昭和17年（1942）、京都帝国大学動物学科の動物生理・生態学講座（旧第二講座）の改組に伴ない、同講座担任として宮地伝三郎助教授に4月20日付教授発令、京都に移った。同年4月29日、時岡助手応召、ただちに北支に赴いた。5月31日、動物学科昭和11年卒の武田信之が助手に任ぜられて着任、病弱の体に鞭打って主として海産橈脚類 *Tigriopus japonicus* の温度適応と雌雄性を研究した。同年10月、武田助手の病状悪化し入院のため休職したが、のち回復、嘱託として復帰した。彼はその研究において注目すべき成果をあげたが、戦後まもない昭和22年6月22日、夫人（松谷千代子嬢）と共に辞し、昭和医科大学に転じた。

天皇陛下白浜御臨幸十周年を記念して、和歌山県博物学会によって昭和14年白浜町江津良に設立された「行幸記念自然科学博物館」（館長 坂口総一郎、館員 山本虎夫）が経営不振のため、昭和18年（1943）6月、一部模様替えのうえ実験所構内に移築、標本設備とも京都大学に移管されることとなった。これに伴ない、館長坂口総一郎を管理者と決め、実験所の嘱託とした（前年11月1日付）。

昭和19年（1944）2月、内海講師ふたたび応召、ただちに南方戦線に向い、6カ月戦地勤務のち広島に帰還、昭和20年9月戦争終結とともに兵役を解除された。

以上のごとく、戦時中は、実験所所員のなかに軍務に服するもの、また罹病するもの続出し、所務は滞り、あたかも動物学教室員の療養所と化した観があったが、その間、宮地助教授らの採集船「Pelagia」を使つての内湾のベントス調査、駒井教授を主班とする木船虫害防除に関する共同研究¹⁾（日本学術振興会第22特別委員会等が組織された）などは困難をきりぬけながら続行された。

昭和20年（1945）、戦局はますますわが国に不利となり、3月にはついに田辺湾上空にも敵機来襲し、焼夷弾落下、水族館建物も銃撃によって被弾した。その間にも戦中最後の臨海実習が実施された（受講学生は山根謹爾、遠藤善之、生島伸茂の3名）。なお、昭和20年現在の所員は次のようであった。

1) その成果は、戦後1958年、岡田要編集のもとに『木船木材被害とその防除』と題して、日本学術振興会から公開された。

教授 駒井 卓（所長、京都在）
助手 野沢 兼文
嘱託 波部 忠重、武田 信之、坂口総一郎
雇員 粕谷千代子

5月以降終戦の詔勅下った8月15日までの3カ月間は、実験所は海軍防備隊の杉本分遣隊に占拠され、立入禁止のまま事実上閉鎖を余儀なくされた。

同年9月末、戦時中苦難をともした青山彦六・貴田芳子の小使夫婦が去った。野沢兼文助手は11月13日結核治療のため田辺市赤木医院に入院、越えて翌21年2月27日、斗病4カ月の後あたら32年の生涯を終えた。

同年11月下旬、終戦直前まで隣接番所山に構築された砲台陣地の爆破を終え、進駐軍に武器をひき渡した杉本分遣隊より実験所は正式に返還された。12月、坂口嘱託は軍により兵舎として使われていたサマー・ハウスに移り、応召中の内海講師・時岡助手も復員、荒れはてた実験所に帰ってきた。戦時中、水族館は武器庫とされたらしい。実験所所蔵の図書は早くから熊野農林学校（現熊野高校）に疎開されていたので無事であったが、標本類は博物館内に放置されたままだったので紛失または破棄されたもの多く、採集船のうち、'Janthina'（戦時中は'塔島'と改称）は台風のため流失、代船'Pelagia'新造の際売り払った実験所旧採集船'入神丸'は立ガ谷入江に繋がれている際、敵機に沈められた由。ボート類も大半失われ、被害甚大のまま新しい年を迎えた。

c) 第三期（昭和21年～昭和30年、1946～1955）

昭和21年（1946）1月、敗戦後の荒廃しきった実験所の立て直しに残留職員7名協力を誓った。しかし、それから当分の間は戦後処理に追われることとなった。

1月31日、初代実験所長駒井卓教授辞任の後をうけて、京都帝国大学動物学科生理・生態学講座の宮地伝三郎教授が新たに所長に補せられた。

博物館の階下の一部は、昭和21年1月より10月までの間、一時的に財団法人日本真珠研究所（所長松井佳一博士）に、昭和22年5月より1年間、町立白浜中学校にそれぞれ貸与された。この頃より戦後の窮乏期にはいり、実験所の前庭は畚畚に変貌するうちに昭和21年12月21日未明4時30分、突如南紀を襲った記録的な南海大地震によって、実験所は壊滅的な大打撃を被ることとなった。研究室の屋根瓦は全部落下し、標本・薬品瓶の破損数知れず、さらに津波のため船や湾奥に設置してあった実験筏も流失した。翌22年1月、天皇陛下御名代として竹田宮恒徳王殿下御来白、4月、破損された貴重標本のラブリカを容れる大形標本瓶が下賜せられた。また、7月には、御下賜金をもとにして流失した採集船'Janthina'の代船が新造された。

昭和23年（1948）、震災復旧工事により、破損された初期の研究室は取り払われ、現在地に新しく木造平屋建ての研究室（303 m²）と水族館（407 m²）が応急改築された。8月1日、新しく装われた水族館が再開され、その経営を白浜湯崎観光協会（実質は番所山植物園長 榎本林作氏）にゆだねることになった。8月5日、震災復興工事竣工式



第二代所長 宮地伝三郎教授

が鳥養利三郎総長以下列席のもとにおこなわれ、実験所の正常な業務が軌道に乗りはじめた。

同年9月1日より、戦争のため中絶状態であった研究業績の海外諸機関との交換を再開するとともに、翌24年(1949)5月より、独自に欧文研究報告“Publications of the Seto Marine Biological Laboratory”を定期的に発行することを決定した。また、教育実習の資として、戦後の印刷事情の悪い数年間、“臨海実習の果”を謄写刷で4集まで発行した(その後、出版事情の好転に伴い、廃刊)。さらに、昭和24年より29年までの5年間、毎夏、和歌山県教育委員会と共催の下に、県下小中等学校生物科担当教員の臨海講習会を実施した。

昭和22年9月30日、政令第204号をもって帝国大学官制が国立総合大学官制に改められ、京都帝国大学は京都大学と改称された。

付設水族館は昭和26年(1951)4月28日文部省告示第108号をもって博物館相当施設に第一次指定されたが、翌27年8月31日より、その経営は白浜観光協会番所山植物園より臨海実験所振興会(京都大学内任意団体として発足)に引き継がれることとなった。

昭和27年(1952)はじめ、田辺湾側北部護岸堤が県工事で完成した。

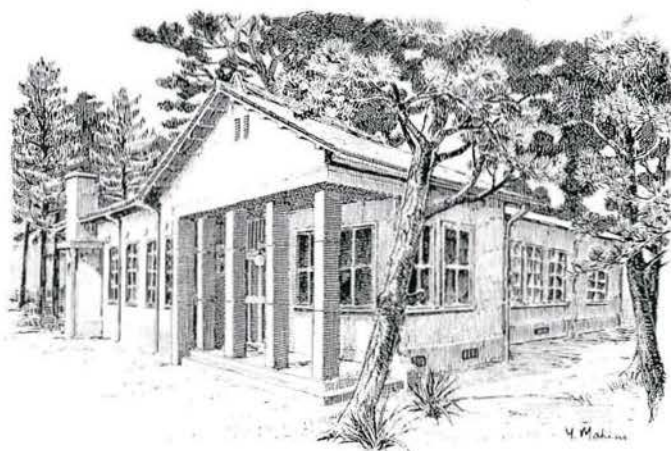
同年10月18日、実験所創立三十周年記念式典を盛大に挙行し、水族館を一般に無料公開した。そして、研究論文18篇および創設以来の研究報告目録をのせた360ページに及ぶ三十周年記念誌(“Publ. Seto Mar. Biol. Lab.”, vol. II, no. 2, 1952)を刊行した。

昭和30年(1955)8月、実験所南海岸に県道より番所山にいたる延長84mの護岸堤が番所山植物園工事費負担で施工され、水族館に通じる現在のふたつの道路が完成した。同年12月28日、水族館は第二次指定により博物館法に基づく博物館相当施設として正式に認定された。

以上、戦後10年間は、実験所職員は戦災や震災の事後処理と復興に奔走し、異動もしばしばおこなわれた。その主なるものを摘記すれば、次の如くである。

昭和21年1月31日、実験所長は駒井教授より宮地教授へ引き継がれた。同年2月27日、野沢助手死去。

昭和22年6月23日、武田信之助手および千代子夫人(元嘱託)去る(のち武田は昭和28年12月17日病死)。同年8月31日、京都光華女子専門学校出身の井符美保が研究嘱託として、また9月11日、京都大学動物学科昭和21年卒の山路勇が助手としてそれぞれ採用された。同年9月11日、時岡助手が農学部水産学科助教授として転じたが、翌年10月31日実験所講師として帰任した。



昭和33年2月ごろの研究室本館(牧野四子吉画伯えがく)

昭和23年9月30日、松井佳一講師（元日本真珠研究所長）依願解職。

昭和25年5月25日、京都大学動物学教室の波部忠重助手実験所兼務を命ぜられ、9月15日、井狩美保嘱託退職し、近江八幡高校教諭として転出した。同年10月8日、白浜小学校教諭山本虎夫が研修員として着任、サマー・ハウスの管理を兼ねることとなった。

昭和27年3月31日、創設以来30年の長きにわたって実験所のために尽した雑賀弥之助技術員が職を辞した。退職後も実験所近くに住み、訪れる研究者や学生達のよい相談相手であったが、昭和32年2月10日、69才で不帰の客となった。

昭和28年10月1日内海講師、昭和29年2月1日時岡講師はそれぞれ助教授に昇進した。昭和29年8月1日、京都大学動物学科昭和28年卒の布施慎一郎が助手として加わった。こうして、終戦後のあわただしい動きもようやく落付きをとり戻した。

d) 第四期（昭和31年～昭和39年、1956～1964）

昭和31年（1956）1月、時岡助教授はアメリカ合衆国スクリップス海洋研究所およびワシントン国立科学博物館に1年余留学し、翌32年5月帰任した。

昭和31年2月より、実験所に「来訪研究者録」を具えつけ、記名してもらうことにした。なお、この来訪録に記される以前に、研究目的で来所した主な外国研究者の名をあげると、F. M. Bayer 博士（ワシントン国立科学博物館学芸官、昭和28年12月）、A. L. Colwin 博士夫妻（ニューヨーク市クイーンズ大学、昭和29年2月）、R. Harry（のち Rofen）博士（スタンフォード大学、昭和30年9月）、R. Séréne 博士夫妻（ベトナム海洋学研究所長、昭和30年10月）等があり、記録以後の初期には、W. D. Hartman 博士（ユール大学、昭和32年7—8月）、A. J. Kohn 博士（フロリダ州立大学、昭和32年8月）、Ch. Hartshorne 博士（ジョージア大学、昭和33年6月）、F. Johnson 博士（プリンストン大学、昭和35年7月）、I. Gordon 博士（大英博物館、昭和36年4月）等々、この頃よりしだいに増加して、海外との研究交流の実をあげるようになった。

昭和33年（1958）5月、年毎に激増する外来研究者を収容する目的で、その前年の3月実験所振興会が買収しておいた隣接地（続9番地、297 m²）に来訪研究者専用宿舎（木造平屋建 246.3 m²）が振興会により竣工し、平沢興総長によって「楽学荘」と命名された。

同年8月17日より12月25日まで、時岡助教授は大阪市立自然科学博物館のメラネシア学術探検に参加した。

昭和34年（1959）3月、実習船「Obelia II」（7.63m長、7 H.P., ディーゼル・エンジン LB 型エンジン、5 KT）が進水した。

また、この年には、日本の南極学術探検生物報告を実験所の特別出版物「Special Publications, Series I」¹⁾として発行することに決定、まず5篇を5月に発行し、37年8月まで12篇、計17篇を刊行したが、第18報以下は昭和38年以降国立科学博物館極地部より発行の「JARE Scientific Reports, Series E, Biology」²⁾にひきつがれることになった。

また、昭和27年9月から水族館の経営が臨海実験所振興会に委譲されたことにより、振興会は専断で「水族館月報」を毎月発行し、実験所や水族館関係のトピックスを載せて好評を博したが、39年4月、国営に移管されたのを機に no. 138 をもって停刊した。

昭和35年（1960）12月、実験所西北岸に船上場が完成し、今後実験所専用の埠頭として使われることになった。昭和37年（1962）4月には水族館改築5年計画の第1期工事として振興会の寄付により鉄筋コンクリート造平屋建の新水槽室（現第4水槽室、地下室を含めて 347 m²）、39年10月には同じく振興会の寄付によりブロック造平屋建の受発電室（40 m²）がそれぞれ旧水族館西側に増築された。

昭和36年(1961)5月1日、内海助教授が教授に昇進した。山路助手は昭和37年3月より翌年7月までアメリカ合衆国およびイタリーに留学したが、昭和39年1月、在職17年後に国立科学博物館に主任研究官として転じた。

昭和39年(1964)1月25日、宮地所長は京都大学を定年退職し、代って発生生物学講座担任の市川衛教授が翌日付をもって所長に補せられた。

この年3月6日をもって臨海実験所振興会は解散し、4月1日より水族館の経営は国に移管された。それにもない、振興会研究員荒賀忠一(京大・農・水産学科昭和29年卒)は助手として、同 田名瀬英朋(近畿大学・農・水産学科昭和39年卒)は教務員としてそれぞれ4月1日付で採用され、その他の振興会職員も国家公務員または非常勤職員となった。また、元日本海区水産研究所資源部農林技官西村三郎(京大・理・動物学科昭和28年卒)も同日付で助手に任用されて、現在の研究陣容がととのった。

以上12年にわたって、戦後のたび重なる災害を克服しつつ実験所設備の改善や研究活動の援助に尽してきた振興会の功績はきわめて大きいといわねばならない。



第三代所長 市川 衛教授



昭和33年2月ごろの水族館入口(現第2水槽室)(牧野四子吉画伯えがく)

e) 第五期(昭和40年~昭和46年, 1965~1971)

昭和40年(1965)3月10日、研究室東側に鉄筋コンクリート平屋建の図書資料保管庫(197 m²)が完成し、実験所創設以来収集した海洋生物関係を中心とする内外の雑誌約800種、単行書約3,000冊を収納した。同年9月27日、旧振興会より京都理化学研究協会に移管された実験所東北岸寄りの付属地に、鉄筋コンクリート二階建の独身職員用宿舎(146.88 m²)が同協会によって建設され、市川衛所長によって「静修寮」と命名された。



図書資料保管庫（右）および研究室本館（左）

実験所が白浜に設けられて以来、研究の対象となり、また、学生の臨海実習のさい野外観察の場として毎年利用されてきた田辺湾の南東部に横たわる島は、その西方に岩礁でつながる属島小丸島を含めても、面積 2.6 km^2 余りの小さな島にすぎないが、その周辺の磯がほぼ同面積に匹敵するくらいひろく干出し、海岸生物の宝庫として世界中にひろく知られていた。ところが、先年来観光事業会社の買収するところとなり、観光施設として開発される計画がたてられたので、京都大学は懸命の手をうち、種々折衝の末、昭和43年（1968）12月、国費で買上げ、ここに島島実験地を設定するととも



島 島 分 室



西方より実験
右方は島島本島、左方は屈島小丸島とその岩礁、

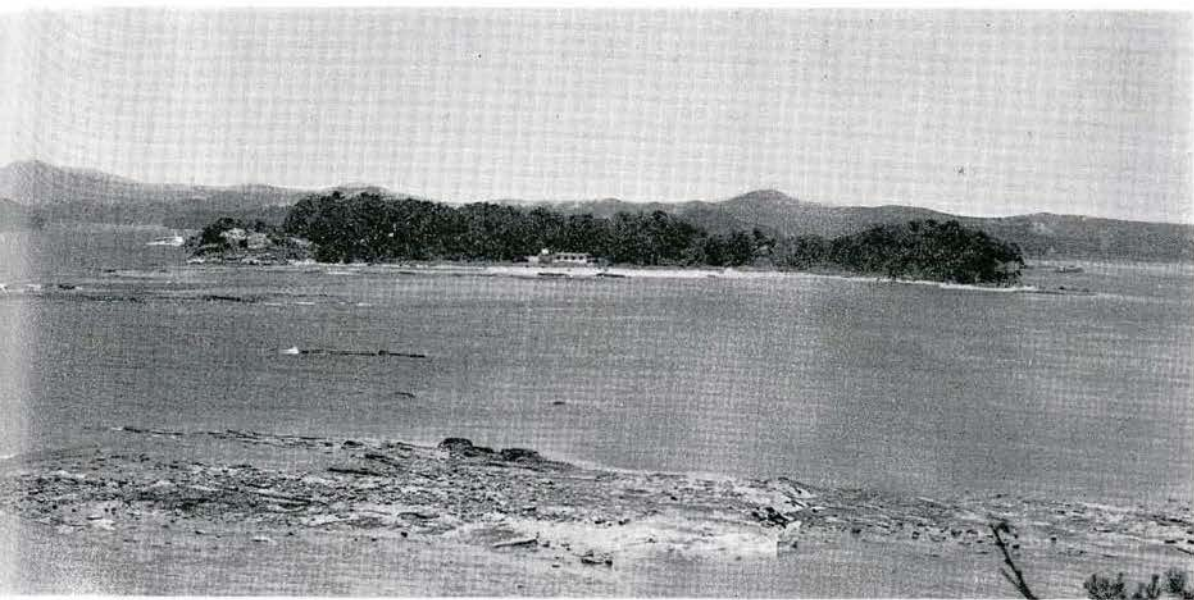
に、46年9月には島の中央部にブロック造平屋建の実験所島島分室（112 m²）を建設した。

昭和45年（1970）3月30日、水族館改築計画の第二期工事として旧標本展示室が鉄筋コンクリート造平屋建の第3水槽室（189 m²）に改築された。翌46年（1971）3月29日には、第三期工事として長年待望の大水槽を含む、鉄筋コンクリート造地上3階、地下1階の第1水槽室（延 1,028 m²）が旧海亀プール跡に完成した。これは、1階に容量250トンの大水槽を設置し、2階からはこれを俯瞰できるようにし、また同階に飼育研究室、3階には標本展示室と展望用バルコニーを設けたものである。

船舶関係では、昭和41年6月、海洋調査に機動性を要請せられる趨勢にかんがみ、ヤマハ高速艇（STR-20 CR、5.99 m長、排水重量900kg、150 H.P.、25 KT）を購入し、'Janthina III' と命名した。43年9月に田辺市多屋平夫氏より寄贈された観光船「黒潮丸」を翌44年3月改造して実習船「Kurosio」（11.00 m長、3.5 ton、12 H.P.）とし、また、39年譲り受けた伝馬船「Zoea」に加えて、手漕ぎボート（プラスチック製ヤマハボート）2隻も入手し、沿岸水域



水族館第1水槽室正面
右方に第2水槽室・第3水槽室もみえる

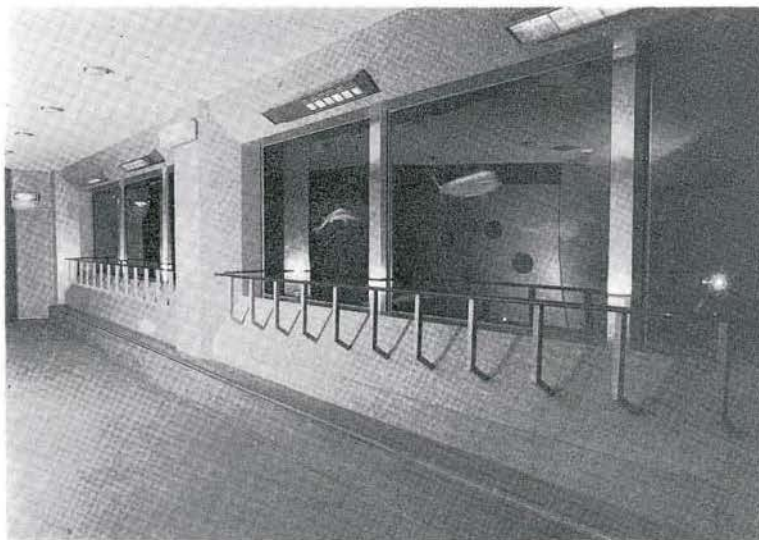


地 島 を 望 む
その向う側に見えるのは神島。背景は対岸の田辺市

における研究調査は戦前とくらべ一段と便利になった。

昭和41年（1966）5月26—28日、実験所初の併任教官会議が開かれ、市川所長以下集って実験所の将来計画につき討議され、また、全国国立大学臨海臨湖実験所長会議の名で、当時の小野真次和歌山県知事あて「田辺湾周辺の環境保全についての意見書」が提出された。

この年の6月20—28日、実験所研究職員は日本自然保護協会（田村剛会長）に協力して和歌山県下の海中公園設定のための候補地予備調査を実施した（その成果は、同年12月、同協会調査報告第27号に“和歌山県海中公園学術調査報告”と題して発表された）。



水族館第1水槽室 1階 250 トン水槽

同年8月、東京で開催された第11回太平洋学術会議に参加した多数の外国研究者が見学に来所したのを機に、正門より水族館まで通じる主道路が舗装された。

昭和42年(1967)3月31日、市川衛所長は京都大学を定年制により退官、所長の任を解かれた(市川教授はその後甲南大学学長に任ぜられたが、46年8月25日死去)。かわって、動物学科生理・生態学講座担任の森下正明教授が4月1日付で所長に併任せられた。

昭和44年(1969)3月31日、森下教授はその併任を解かれ、4月1日付で内海教授が最初の専任所長の任に就いた。

同年5月より荒賀助手は実験研究材料動物の採集技術および供給システムについてイタリア国ナポリ臨海実験所で半年間研修し、11月帰任した。

水族館の国営化にともない実験所の事務や技術方面を担当する行政職は4人から16人に増加し、事務掛長もおかれるようになった。また、この数年間に海洋生物学を専攻しようとする大学院学生や外国および国内留学生、研修員等の数もしいに増加してきたので、昔日の賑はなくなったものの、施設全体としての古めかしさと狭さを痛感させられるにいたった。

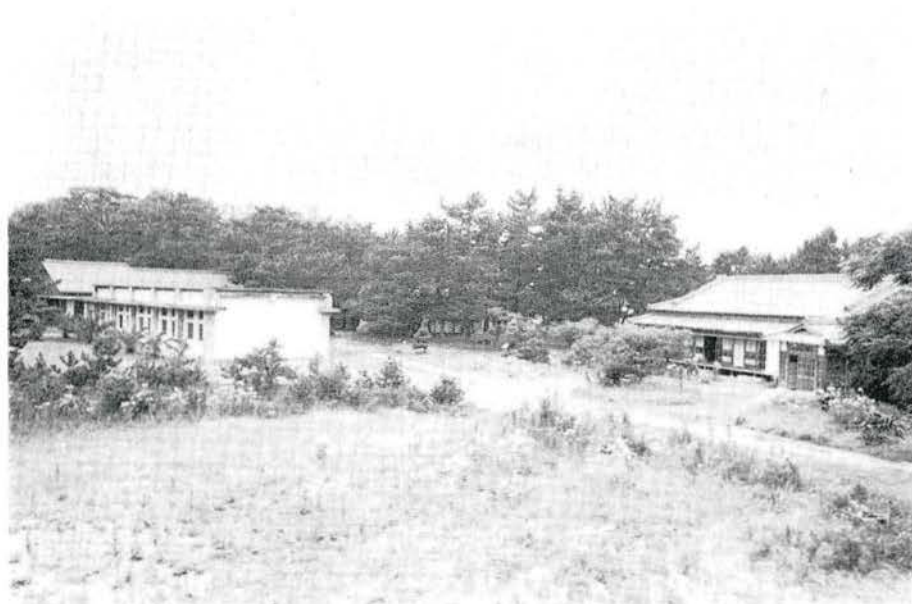


第四代所長 森下正明教授

3. 現 状

a) 施設のあらまし

実験所創設当時からの敷地、すなわち国有地 40,627 m² に加えて、昭和43年に田辺湾奥の品島実験地 25,980 m² が新しく実験所の管轄下に入った。



東南より望んだ現在の実験所構内
右方は学生寄宿舎、左方は図書資料保管庫および研究室本館。中間の松林の木のまぐれに特別研究室が見える。

建物関係では、研究・実習関係の建物、学生および職員用宿舍など、創立当時のままのものもあり、また、第一室戸台風や南海大地震の災害復旧により応急的に建て直された木造家屋であるため、老朽化はなほだしく、シロアリの食害にも悩まされており、早急に鉄筋コンクリート造りに改められることが望まれる。図書資料保管庫(197 m²)は7年前に建てられた新建築ではあるが、近年急激にふえつつある図書や保管記録資料で近い将来に飽和状態に達することは確実で、本格的・総合的な図書資料館としての機能を果たすためにはさらに倍以上に増築する必要がある。水族館は実験所振興会による寄付および国費による改・増築によりその主要部分が鉄筋コンクリート造りに改められて、その面目が一新したが、まだ第2水槽室(旧南・中水槽室)が木造のまま残されている。

これらの建物に収容されている設備備品等は、昭和47年3月現在で、次のようになっている。

機 械		314点
器 具		1,776点
図 書	和 書	1,204冊
	和雑誌	4,328巻
	洋 書	2,249冊
	洋雑誌	8,568巻



図書資料保管庫内の書架を飾る雑誌類

標 本 海産動物標本

液浸標本 4,980瓶

乾燥標本 2,960点

海藻腊葉標本 2,635枚

飼育動物 694種, 4,940 個体

所屬船としては、既述の 'Kurosio', 'Obelia II', 'Janthina III' のほか、昭和47年3月進水した漁船登録調査船 'Pelagia II' (FRP, 12.3 m長, 7.29 ton, 39 H.P., 10 KT; WK2-2227) を併せて、4隻現有している。しかし、沿海航行に適した大型調査船の入手も、研究が進展するにつれて、ますますその必要性が増してきている。



実験所所屬船舶
左から 'Pelagia II', 'Kurosio', 'Obelia II'

b) 研 究 活 動

実験所では、開設当初定められた方針に従って、京都大学理学部所属の学生および大学院学生の教育・実習・研究指導に併行して、専任所員は各自の自由な立場で専門分野の研究に従事している。また、随時来訪する内外の研究者の数は年毎にふえ、最近3年間の実績は年平均168名、延人員で462名に達している。

現在までに実験所所員によっておこなわれた主な研究としては、腔腸動物・有櫛動物・軟体動物・節足動物・毛顎動物・原索動物および魚類の分類学および形態学、内湾ベントスおよびプランクトンの群集生態学、潮間帯生物群集および藻場生物群集、チグリオプスの適応性、ウミサボテンの日周期活動、イセエビ類の形態学および生態学、その他をあげることができる。最近では、紀南海域をはじめとして足摺海岸、能登海岸、若狭湾、天草海岸等の海中公園候補地調査をおこない、海中公園についての国の方針を決める上で一定の役割を果たした。このなかで、紀南海域について、全般的な造礁サンゴの種類相・分布状況がわかり、この海域のとくに田辺湾の海洋生物学上における重要性が明らかになった。

現在、実験所において専任所員および在住大学院学生によって各個におこなわれている研究課題は次のとおりである。

八放サンゴおよび蔓脚類の分類学

毛顎動物および原索動物における分類学と形態変異の研究

造礁サンゴの実験的研究

造礁サンゴ帯生物群集の研究

サンゴ礁魚類の分類学的研究

海産動物の生態・生活史

紀伊水道の沿岸生物相の研究

コップムシ科等脚類の分類学と個体群生態学

ハマトビムシ類の生物学

ウミサボテンの日周期活動の解析

ウニ類の生物学

砂中間げき生物群集の研究

また、共同研究として特記すべき課題は、昭和44年以来開始した島島実験地における“一世紀間調査”であって、豊富な同島周辺の沿岸生物相の消長を定期的に調査して記録に残し、また、同志社大学理工学部の小林直正教授の協力を得て、周辺水域の汚染程度を定期的に調査し、自然環境の保護と、“種場”の育成に積極的に努力していることである。

c) 業 績 の 発 表

実験所の欧文研究報告“Publications of the Seto Marine Biological Laboratory”は、昭和24年(1949)創刊以来、着実に刊行を続け、最近では年6回発行され、昭和47年(1972)3月で第19巻を完結するまでにいたっている。逐年需要が高まって、海洋生物学および系統動物学に関する重要刊行物として世界中より高く評価されるようになった。特別刊行物“Special Publications”の第1集として出版した“Biological Results of the Japanese Antarctic Research Expedition”(日本南極学術探検生物報告)(1959-62)完結のあと、第2集“Ecology and Biological Production of Lake Naka-Umi and Adjacent Regions”(中海と周辺地区の生態と生物生産)を昭和39年(1964)以来刊行中であるが、現在は中断している。

実験所でおこなわれた研究のうち海洋生物学に関係する業績の大部分は、専任所員であると来訪研究者・大学院学生・学生であるとを問わず、上記欧文研究報告に発表されるのが建前であるが、他の学会誌等に発表される例も多いので、これらは別刷を購入し、創設以来一連番号を付して、欧文研究報告とともに、内外の関係諸機関に配布している。研究業績は、欧文を主とする“Contributions”と和文を主とする“邦文業績”の2シリーズに分けられており、昭和47年(1972)4月現在で、その数は前者563篇、後194篇にのぼる。これらの研究業績の目録は、1922年より1951年までの分は“Publ. Seto Mar. Biol. Lab.”, vol. II, no. 2, pp. 357-400 に掲載済みで、それ以降は同誌各巻の後尾に1箇年分ずつ分載されている。

水族館における調査研究および事業の結果は、日本動物園水族館協会機関誌および同月報に報告されている。

d) 教育活動

京都大学理学部の動物・植物・生物物理および化学の各学科、農学部農林生物および水産学科の臨海実習を毎年春と夏に計3週間実施している。その他、近畿各府県の諸大学(約15校)を合わせ、昭和46年実績で、学生約250名、延2,340名の実習を指導している。また、現在は、京都大学理学研究科動物学専攻の大学院学生のうち、海洋生物学を専攻するもの4名、その他を専攻するもの1名の研究指導をおこなっている。



実験所現職員

下 段 左 から	西 村 三 郎	山 本 虎 夫	近 藤 真 三	時 岡 隆	内 海 富 夫	辻 キ クニ	辻 豊 松	荒 賀 忠	中 段 左 から	山 本 三 郎	大 槻 定 吉	竹 田 哲 夫	山 本 善 方	左 海 昭 三	田 名 瀬 英 朋	布 施 慎 一	南 家 美 代 子	古 家 昭 美	梅 本 起 世 枝	上 段 左 から	森 山 豊	太 田 満	谷 坂 美 和 子	榎 本 ま 枝	布 施 良 子	古 家 昭 治	山 崎 子	細 尾 佳 子	林 茂
-------------------	------------------	------------------	------------------	-------------	------------------	--------------	-------------	-------------	-------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-----------------------	------------------	-----------------------	------------------	-----------------------	-------------------	-------------	-------------	-----------------------	------------------	------------------	------------------	-------------	------------------	--------

e) 付 属 水 族 館

実験所附属水族館は、昭和6年一般公開されて以来、白浜温泉の名声とともに観覧者数もいじりしく増加し、社会教育上大きな貢献をしてきた。その後、数次にわたって水槽室も増改築されたが、昭和39年に国の直営に移ってからは施設設備の改善は容易におこなうことができず、また、交通業者との連帯契約もとりのやめとなり、観覧者数は漸減の傾向にある。しかし、収容動物の特異性と多様性、個体数の充実の点で、特異な存在として国の内外でその名声はいぜんとして高く、残る第2水槽室の改築によって、一連の水族館整備充実計画が完成したあかつきには、実験所の研究活動と水族館事業との両面への大きな成果が期待される。

昭和46年度における水族館観覧者は402,700名、収入は28,452,500円である。

f) 職 員

所 長	教 授	内 海 富士夫	(動 物 分 類 学)
	助 教 授	時 岡 隆	(動物分類学・浮遊生物学)
掛 長	助 手	布 施 慎一郎	(海 洋 生 態 学)
	助 手	西 村 三 郎	(海洋生物地理学)
	助 手	荒 賀 忠 一	(魚類学・水族館学)
	教 務 員	田名瀬 英 朋	(海産動物の生態生活史)
	非常勤講師	山 本 虎 夫	(貝類学・藻類学)
	事 務 官	林 茂	(事 務 総 括)
	事 務 官	布 施 良 子	(収 入 ・ 経 理)
	事 務 官	南 美代子	(収 入)
	事 務 官	古 家 昭 治	(庶 務)
	事 務 官	谷 坂 美和子	(収 入)
	事 務 官	竹 田 哲 人	(経 理)
	事 務 官	辻 豊 松	(宿舍・所内整理)
	技 官	近 藤 貞 三	(機械電気保安)
	技 官	左 海 昭 三	(船 舶 ・ 工 作)
	技 官	樫 山 嘉 郎	(採 集 ・ 飼 育)
	技 官	森 山 惣 一	(〃 ・ 〃)
	技 官	太 田 満	(〃 ・ 〃)
	技 官	山 本 善 万	(船 舶 ・ 工 作)
	技 官	大 槻 定 吉	(電気機械保安)
用 務 員	事務補佐員	細 尾 佳 子	(図 書)
	事務補佐員	古 家 昭 美	(改札・館内整理)
	事務補佐員	梅 本 起世枝	(〃 ・ 〃)
	用 務 員	辻 キクエ	(宿舍・構内整理)
	用 務 員	辻 わき枝	(〃 ・ 〃)
	用 務 員	榎 本 はま枝	(構 内 整 理)
	用 務 員	山 崎 葉 子	(館 内 整 理)

他に、京都大学大学院理学研究科学生5名が在住している。

g) 併任教官および実験所運営協議会学外委員

理 学 部 教 授	藤 永 太一郎	(分析化学・海洋化学)
理 学 部 教 授	森 主 一	(陸 水 生 物 学)
大津臨湖実験所長		
理 学 部 教 授	加 藤 幹 太	(放射線生物学)
理 学 部 教 授	森 下 正 明	(動 物 生 態 学)
理 学 部 教 授	国 司 秀 明	(海 洋 物 理 学)
理 学 部 助 教 授	岩 槻 邦 男	(植 物 分 類 学)
岡 山 大 学 教 授	吉 田 正 夫	(動 物 生 理 学)
玉野臨海実験所長		
東京教育大学教授	江 原 有 信	(動 物 生 理 学)
下田臨海実験所長		

旧 研 究 職 員 名 簿

幹 事

(代行) 大正11年～14年	教 授	川 村	多実二 (死亡)
(兼務) 大正14年～昭和4年	教 授	駒 井	卓 (死亡)
(兼務) 昭和4年～12年	教 授	岡 田	要

所 長

(兼務) 昭和12年11月～21年1月	教 授	駒 井	卓 (死亡)
(兼務) 昭和21年1月～39年1月	教 授	宮 地	伝三郎
(兼務) 昭和39年1月～42年3月	教 授	市 川	衛 (死亡)
(兼務) 昭和42年4月～44年3月	教 授	森 下	正 明
(専任) 昭和44年4月～現在	教 授	内 海	富士夫

所 員 (在住)

大正10年10月～昭和6年1月	助 手	井 狩	二 郎 (死亡)
大正11年3月～昭和8年9月	助教授	赤 塚	孝 三 (死亡)
大正12年4月～昭和7年(?) : 昭和10年1月	助 手	宮 下	義 信 (死亡)
大正13年6月～大正14年(?)	雇 員	管 原	照 清
昭和4年4月～8年7月	助 手	滝	巖
			(現広島大学名誉教授, 京都市在住)
昭和6年1月～11年4月	助 手	椎 野	季 雄
			(元三重県立大学水産学部教授 現志摩マリーナランド館長)
昭和6年3月～11年4月	副 手	杉 野	久 雄
			(元大阪教育大学教授, 泉南市在住)
昭和9年3月～13年5月	嘱 託	平 林	清 (元京都大学化学研究所助教授)
昭和9年3月～15年11月	雇員の嘱託	徳 岡	泰 広
			(元日本油脂K.K.研究部長, 川崎市在住)
昭和11年4月～17年4月	助教授	宮 地	伝三郎
			(現京都大学名誉教授, モンキーセンター所長)
昭和14年3月～21年2月	助 手	野 沢	兼 文 (死亡)
昭和15年6月～17年7月	嘱 託	増 井	哲 夫 (死亡)
昭和16年12月～20年3月 : 昭和25年5月	助手(兼)	波 部	忠 重 (現国立科学博物館主任研究官)
昭和17年5月～22年6月	助手の嘱託	武 田	信 之 (死亡)

昭和18年3月～9月；昭和22年9月～38年12月

嘱託のち助手 山 路 勇（現東京水産大学教授）

昭和19年4月～21年11月 嘱 託 坂 口 総一郎（死亡）

昭和19年4月～22年6月 雇員のち嘱託 粕 谷 千代子（現市川姓，武蔵野市在住）

昭和21年2月～23年9月 講 師 松 井 佳 一（現近畿大学水産研究所長）

昭和22年8月～25年9月

嘱託のち研修員 井 符 美 保（現近江八幡高校教諭）

あ と が き

実験所は創設以来逐次研究陣容が強化されてきたとはいふものの、現在ほぼ国立大学の1講座に相当するだけの規模をもつにすぎない。諸外国、とくに欧米先進国とくらべ、また現実面から提起される複雑多岐な問題の山積をみるにつけ、わが国における海洋生物学研究の現状は大きく立ち遅れているといわざるを得ない。少数の所員と乏しい経費の下で苦難の道を歩んできた先人の労苦は察するに余りあるが、それを克服しつつこの50年間に海洋生物学の進歩に貢献した当実験所の研究教育活動は内外に高く評価されるに違いない。

最近、学界および研究者の間で、全国的規模において共同利用ができる中心的海洋生物学研究施設をわが国にも設けたいという気運が高まってきて、昭和26年以来結成された全国国立大学臨海臨湖実験所長会議が開催されるたびに討議が重ねられ、当実験所がその第1候補として支持されるにいたった。

当実験所およびその所在地付近は、

- 1) 海産生物が豊富であり、かつ地理的条件にめぐまれている
- 2) 敷地が十分である
- 3) 図書・文献のコレクションが完備し、情報交換の実績がすすんでいる
- 4) 飼育水槽システムが完備している
- 5) 海水が汚染されていず、将来の汚染も防げる可能性がある
- 6) 国内外における共同利用の実績がすすんでいる

等の諸条件をそなえており、海洋生物学の研究センターとしての役割をはたすに国内での最適地であることは衆目の一致するところである。

現在めざされている中心的共同利用研究施設の概要は次のようなものである。

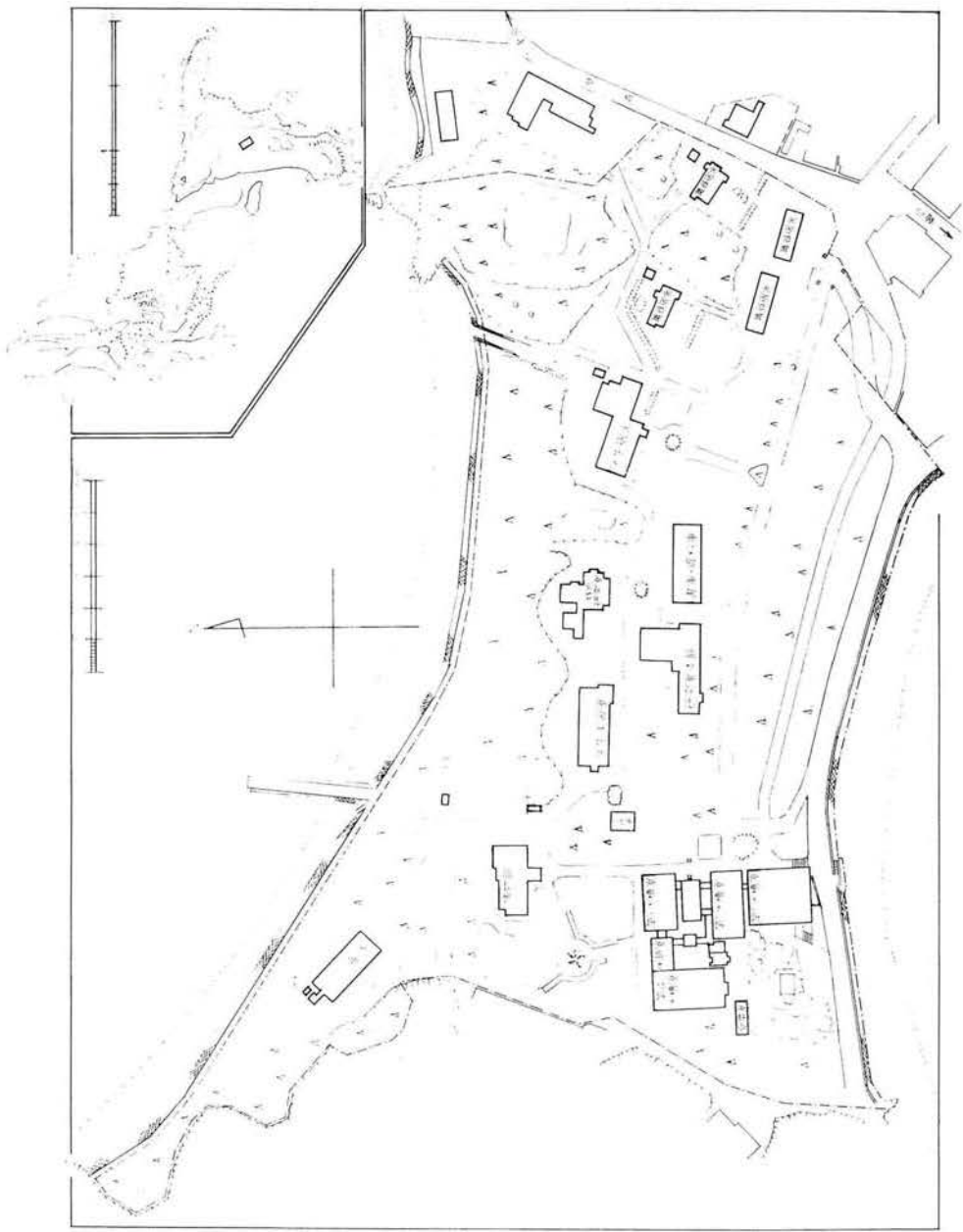
- 1) 京都大学理学部生物学関係学生50名の実習・宿泊設備をそなえる
- 2) 海洋生物学専攻大学院学生の定員 修士課程6名、博士課程6名(延30名)
- 3) 年間6名の研究目的を同じくする流動研究員の受け入れ
- 4) 最大限60名までの共同利用研究者を収容する研究室・宿泊施設をそなえる
- 5) 研究部門

§ 系統分類・形態など海洋生物学の基礎的研究分野を2部門

§ 海洋生物の生活と環境、生物生産、飼育培養、公害問題等を解明する生態学的研究分野を2部門

§ 発生生化学・生理化学・電気生理学をふくめた生理学的研究分野を2部門

当面は、京都大学理学部付属の、学部学生および大学院学生の実習・教育をおこなう教育施設と、全国の研究者が共に自由にその施設を利用できる研究施設との任務をあわせもつ新しい海洋生物学研究施設として、新生の第一歩を踏みだすことがわれわれの念願であり、また理想に到達する道であると考えらる。



瀬戸臨海史跡可建物配置図(右上の挿入図は昌島実跡地)

昭和47年 8 月30日 印刷

昭和47年 9 月 5 日 発行

編 集 和歌山県白浜町
京都大学理学部付属瀬戸臨海実験所
創立五十周年記念事業実行委員会

印 刷 京都市上京区寺ノ内通小川西入
山代印刷株式会社 電話 441-8177

発 行 和歌山県白浜町
京都大学理学部付属瀬戸臨海実験所
